

ともに



平成 30 年 3 月 6 日発行 《文責》 校長:濱崎 豊治 副校長:北村征一郎

成長に感謝! 「4年生・2分の1成人式」

2日(金)に開催し、とても素敵な時間を4年生児童と保護者、教職員で共有することができました。校長先生からは、成人証書を受け取った4年生に、次の3つができるようにがんばってほしいと激励がありました。

- ① 朝は人から起こされずに自分で起きること
- ② 病気やけがは別として、自分の足で登下校すること
- ③ 感謝の気持ちを声に出し、お家の人や周りの人に1日3回以上「ありがとう」と言うこと

10歳の節目を迎えた4年生の児童は、みんな気持ちを込めて元気よく表現し、成長している姿をしっかりと見せてくれたと思います。一人一人の児童とそれぞれの保護者との感謝の手紙の交換もあり、心が通じ合うよき機会となったことでしょう。これからの感謝の気持ちを忘れずに成長して行ってほしいと願います。保護者の皆様も、御忙しい中、多数御参観いただきありがとうございました。

【保護者の感想】

- 思い出に残る式をありがとうございました。これからの成長もますます楽しみです。周りの人に感謝する心を忘れず、私も日々を過ごしたいと思いました。先生方もおつかれ様でした。
- いろいろな準備を頑張ったようですね。いろいろな人達に支えられているということ、しっかり感じてもらえたら良いです。10歳でも、とても成長しているように今日思えました。母としても、もっともっと1日1日大切に生きていければと思いました。
- 子どもの成長を喜び、お互いに感謝の気持ちを伝える良い機会となりました。とても良い式でした。ありがとうございました。

2分の1成人式 プログラム

【第1部】

- 1 開会
- 2 2分の1成人証書授与
- 3 校長先生の話
- 4 合唱・誓いの言葉
- 5 閉式

【第2部】

- 1 はじめの言葉
- 2 思い出劇
- 3 DVD上映
- 4 副校長先生の話
- 5 終わりの言葉



～「感謝」の心は力になる!～

平昌オリンピック 2018 での選手の活躍には感動しました。インタビュー等では、必ず支えてくれた方々への「感謝」の言葉が聞かれます。アスリートである前に、人として素晴らしいと感じます。選手には欠かせないメンタルトレーニングにおいて、「感謝」は脳を肯定的にさせ、不安や困難を乗り越える「力」をわき起こさせるそうです。



先日、入試に臨むこの時期の「9年生の学年だより」の中で、とてもよいお話が掲載されていたので2分の1成人式でも紹介しました。御一読ください。

大学を卒業した青年が、会社に入るための面接の試験を受けたときのことです。その席で社長から「君は今までに親の体を洗ってやったことがあるかね?」と聞かれました。青年は、「いいえありません。」と答えました。すると、社長は「すまないが、明日またこの時間にここへきてくれないか。しかし、ひとつ約束がある。それまでにぜひ親の体を洗ってきてほしいのだが、できるか。」といいました。青年は「はい、なんでもありません。やってきます。」と答え、家へ帰って行きました。

この青年の家は貧しく、父親はすでに亡くなっています。母親は呉服の行商で必死になって働き続け、この青年は大学を卒業できるまでになったのです。

その日、青年が家に帰ると、行商に出掛けた母親はまだ帰っていませんでした。「帰ってきたら、どこを洗ってやるか?」と考えた青年は、外に行って仕事で足を汚しているに違いないから、母親の足を洗ってやるかと決め、タライに水をくんで母親を待ちました。

するとそこへ母親が帰ってきました。青年は、「足を洗ってやるよ。」という、元気な母親は「足ぐらい自分で洗うよ。」と答えました。そこで青年は、洗っていかねばならない理由を話すと、母親は「そんなら洗ってもらおうか。」と納得して、青年のいうままに腰を下ろしました。母親の足もとにタライを持っていった青年は「さあ、ここへ足を入れて。」という、母親はいわれるままにタライに足を入れました。

青年は右手でその足を洗おうと思って、左手で母親の足を握りました。しかし、握ると同時に、青年は右手で洗うことができません。そして、両手で母親の足にすがりつくと、大きな声を上げて泣きました。生まれてはじめて母親の足を握ってみて、母親の足がこんなにも固い足になっていたことを初めて知ったのです。青年は大学生の時、母親が毎月送ってくれるお金を「あたりまえ」のように思い、何も感じずに平気で使っていましたが、あの金はお母さんがこんな固い足になってまで、自分に送ってくれていたことを、今初めてわかったのです。

今まで気づけなかった母親への恩、感謝を、握っている母親の固い足を通してはっきりと知った青年は、泣かずにいられたのでした。青年に恩を感じる素直で正しい心が生まれたのです。

次の日、いわれた通りの時間に会社に行った青年は、「恩の大切さを初めて知ることができました。」と、嬉しそうに社長にお礼を述べ、その会社に就職することができたそうです。

児童文学作家の花岡氏は「親の「恩」に限らず、自分の暮らしが「あたりまえ」を超えたさまざまな「恩」に支えられて成り立っていることを、この感動的な話を通じて考えてもらいたい」とこの話をしめくくっています。観瀾校でも、特に3学期は「感謝」をテーマとした取組が盛んです。子ども達には、自分を支える全てに「感謝」する心を持ち、自分の力を高め、培った力を十分に発揮してほしい、それぞれの人生の充実につなげてほしいと願っています。